



泠
鋒
資
鏡

下

價5
129
2





門4音
號129
卷2

談鋒資銳序

昔唐劉子元著史通吳兢

敬業館
稱其足傳於

不朽夫學者之弊精而不博博而不精

沒世窮年茲々砢々仰屋著書亦歸湮

沒豈得傳於後世哉荒井堯民近日著

一書目曰談鋒資銳其言鯁鯁觥觥汪

洋深博商較古今史籍而貫穿雜書使

武田序



今世之學者見之。驚心動魄。嘆賞以爲
不及也。夫天下之人孰有不嗜談論者
乎。平居無事。友朋交會。相夸剪韭
細論。開口而笑。縉紳先生之所嗜也。彼
里巷之兒童走卒。以俚鄙之談。沾沾自
喜。道聽塗說。言之者無益。聞之者不中
用。則徒逞口角而已。又有何益乎。堯民

少而負逸才。爲文蒐古。一時騷人詞客
莫不與之交游。受業於先人之門。不數
年而其學大成。確乎不可拔。雄辯風生。
以其談鋒。壓倒儒流。且考証史籍。論議
中其窳繁。元々本々得古人之要領。輯
爲此編。實一部之史通。而爲談藝家之
金丹大藥焉。唯惜其爲書得陳氏之儲

者爲多。而稍別闢町畦。自足傳於後世。世之學者一讀此編。早闢其才地有益。於學問。又豈小補云乎哉。於是乎序。

文政十二年五月中浣

武田信成撰

談鋒資銳卷之下

江戸

荒井繇行堯民著

山雞やまどりと己おのれの羽毛うぶと愛あいして水みづを映うつして舞犀牛まいぎにうと己おのれの影かげと悪わるく志こころして水みづを照ありて見みるを欲ほつせし常に濁水にごしみづを飲のむ物性ぶつせいの相あ互ひする事こと如此このごとく——羽毛うぶの身みは在あるさく自らみづか妍えん姪めいよよろしく愛憎あいその想おもを起おこす二物ふたぶつの愚おろち。いんや人ひとも亦またこれ何なに平叔へいしやく魏わいの人ひと性せいは自らみづか動靜どうせいと喜よろこび粉こな白手しろてと去さらざりて行步ゆく影かげと顧くわんる是山雞やまどりの羽うぶ毛もうと愛あいする事こと同おなじ。夏候なつご元讓げんじやう魏わいの人ひと己おのれの偏音へんおんある哉や

談鋒資銳 卷之下

悪み鏡に對する母は悲怒して地を撲つ是犀牛の影と
惡むおあしきある。

无啓の民に死して心の臓朽む。細民国の民に肝の臓朽む所
謂朽むるものは総く幻形に何れもあはれ比干の心弘演

の肝を史傳に載る千歳之美譚ある是を是真
朽むるは左傳國語に見たり叔孫豹のいふ
先大夫死して其言後世に傳るといふ所の真

死而不朽と
舟と馳る馬と名づけし孫權の時より言へ馬の陸を
走るの如きを取る馬と驚帆と名づけし魏の曹真

字の子丹を言ふ風の帆を馳る如し。いま人眞の景を
見くは畫の如きと言へて畫の景を見く眞の如きや
言又夢事と譚して醒時の如しと言ひ醒時の事を論ぜ

るは夢に似ると言ふ然るも則天下に定る名何んや
公孫龍の白馬を馬は非むと言ふ味の何んや

今つて公孫龍子に偽作ある白馬指物の言を莊子荀子に
見たり白き色を馬に非むといふ大意あり。

梅小望めば津を生じ茶を食へ決つて五
液の外より至るものあり。暮る涎を垂て汗

と發して是も五液の内より至る者あり。此を総く

性情の鍾るとも後形體とてに隨ふ孟子所謂志一
至とば氣とれは次とつと一徵の論と何とて也。

氷を割く双鯉の躍り出ると王祥あり氷を叩く一
魚踊り出ると王延平あり氷を叩く童子の鯉を送
るものには楚僚あり泣く河神と禱く氷り開て尺
許の鯁を得ると查道あり又焦華と寒中へ瓜を
得ると父の病を愈へ王薦と雪中へ瓜を得ると母は
渴を止む孝思の感とる處動植の類をふ伐時非
どし是は感とる彼の季夏凍魚膾を思ひ仲冬
十月

小生地黃と思ひ南面の尊を以て有司を功責し
熱恭客大辟を加ふ至ふと得ると何とては至
誠の神を感動し非時の異物を得ると只孝の一事
のみあり。

松と五大夫五大夫七大夫の大夫中の小封始皇あり柏と
五品大夫ふ封武后あり石と盤固侯ふ封宣和
宣和宋の五年欽宗れ時あり鶴と軒乘しむる冬衛の
懿公あり左傳蝦蟇の廩を得ると晋の惠帝れ
時あり雞雁鳥の縣幹小食犬馬赤彪儀同或道遙

郡君或も凌霄郡君等の封號ありしに北齊の幼主此
時あり。夫木石鳥獸みな爵祿を得たり。然るに
又ち爵祿は何ぞ以て士人を榮とせしむらんや。

泰山の五大夫の松といふ本五大夫といふ。秦の宦あり。又獨異
志を閲すれば然らば。始皇二十八年始皇泰山に登りし
半に至つて忽ち大風雷雨電一々路の傍に五松樹あり。數
畝を蔭翳せしむるも封して五樹大夫とあり。是を五大
夫の松由て名づくる所あり。人ありわづらひ松の秦の封を
受ると以て大に松乃汚辱とせしむ。當時松樹の上り人ありて

言ふ。道德仁義ありて天下を得。みどり命を受く。天
帝何ぞ以て之を封せしむ。中と言ひ。然るに則ち五の松は実
に以て嘗て秦の封を受ざるあり。後世強て五大夫
と以て松小命をいふ。是をいひんや。

時風雨暴に至る樹下に休み因て其樹を封して五大夫とあり。何の樹あり。後
漢の時に應邵漢の宦儀を作る始に松樹とせしむ。蓋し松柏多く泰山の中天門に
あり。應邵の時に至つて猶在り。故にその松ありと知るあり。五大夫は蓋し秦
の第九級あり。曹參が知し爵七大夫を賜ふ。遷り五大夫とあり。是あり。後人此を以て
解さず。遂に松を大夫と封せしむ。五といふ。故に唐人の松の詩に不羨五樹封の句あり。
皆これ循襲するに不攻ん之の過あり。又五雜俎に秦の朝めて松を大夫と封し。東の朝
も石を三品と封し。李誠の松を詠し。云半依巖岫倚雲巖。其事
耐歲寒。事煩為清節。累秦時曾作大夫。宦判公三品の石を詠し。言草没昔侵。蓋道周詩
思三品竟何酬。固亡今日頑。無耻以為當年不與謀。松と石と無知の物あり。一は二朝の
名寵有り。故に松の黜濼とせしむ。猶万世の包彈を免るるに矧や。士大夫その進退辭受の際に

おわて菊をまき
らんやを云り。

晋北文公の必ま天下を霸するを知らざるの從者三士河を以て

以て云る。狐偃趙衰賈佗宋の壽王宗の必ま帝たるを知るを其左右

二人河を以てあり。張旻風雲龍虎を以て偶然の河

を。竟民接つる小国君無道ありとも良臣二三の輩をば国を以て

漢の大官園に冬生むる葱韭菜茄の類を種覆せし屋廡を

以て。晝夜蘊火ををゆ。温氣を以て生む其種

所の冬生むる物を進御に供せあり。寧只菜茄の類の

みみは非む。名花異州を以て凝互の辰小列する。晚今

人工の巧み天工を奪ふに至る音あるを昔。邵信臣前漢

不時の物を見く供養を奉むるを言り。深く聖人の

不時を食せざる。昔よかのよ。又桃李冬華を賈る霜草をわ

まら春秋よりを錢書。以て災異とあり彼の春華を

し。冬生むる物又何を以て非時は進御に供せざるを

乾鵲を来を知り狸を往を知る。巢居する鳥を大風を知り。

獺を穴棲する。獺を洪水何を知る。連日雄あり。晏を知り陰諧

雌あり。雨を知り燕を戊己の方を知り。避く鵲を大歳の方

を知り。内典に言ふ春蟲動の含露あるを皆佛

性何りと正しく覺る処におおく是を見ざるべし
 と言ふ。淮南子に乾鵲を来と知つて往と知らざるを
 来と知ると年風多きを兼を下の枝に作るの智何るよ
 似たり。志うもどくも童子の其卵を探る事ハ察せり。
 是の愚ある所ありといへり。

晏子ハ狐裘を着る事三十年。礼記張儉ハ敝袍を穿て三十年
 と經く用也。盡史張儉ハ寒中ハ便殿と事を奏す時ハ聖宗張儉の衣袍敝惡あり。
 見せしむ其衣袍を易む帝その故と問給ふ時張儉對て曰臣の袍を服する
 事ハ三十年當時上下共ハ奢靡ある故微くこれと以て諷諫せり。
 下彬が著る所の冠十二年ありて改易す。南齊書彬ハ下彬と
 冠十二年改易せり。

虞玩之ハ躡所の履二十年ありて辨易せり。南齊書大祖
 鎮く時ハ朝野の人々皆敬を以て其頃虞玩之ハ履を踐く席を造りて
 大祖履を取て視を以てこれと斜鏡ありてあり美と有りて芒を以てつあを
 大祖問て言卿の履ハ幾載ある玩之對て征北の行佐ハ拜せり
 時此と買ひ著る事ハ二十年貧士竟ハ辨易せり大祖と其儉あり
 長孫道生ハ一つの熊の皮の障泥を数十年ありて易む。
北史魏の司空長孫道生ハ廉約ありて身三公とあり衣ハ華飾
 ちハ食ハ味を兼ぎ一の熊の皮の障泥を十年ありて易むと有り。この人々ハ儉
 徳と世間の靡風を挽回したる也。
 延陵の季子釵を掛る所ハ生州一種有り。能心疾を療む信心の
 感むる所あり。子陵の釣臺ハ盡く白茅を生むと其心の感む
 る所あり。長木ハ鍾室と草丹とと血ハ漬が如く。怨心の感

さる所あり。

鍾山の玉と爐炭を以て。炊く事七日七夜。色澤變

じ。摩尼の寶珠と泥濘の中。置て百千歳を経。深

汚れ。本體みづろ。堅瑋あるを以てあり。燒民接つる。君子徳を玉。此

孔愉と龜を放る候。あり印を鑄る。とらる龜顧るの

祥何ぞ。晋書其卒及ん。龜木を啣。孔愉の墓に

名づけ。橋と龜回橋と名づ。生るを放るの報。此に至

る。龜と四靈の一と稱。固より諸の虫魚とは異なる。

田獵とるのむ。ものは獸を得ざる。の前は其創の小な

るを恐る。是を創すれば。獸屈る。己は是を得る。肉を傷る

の多きを恐る。人情あり。君子曰。凡得失。関るもの

類おあり。又美人彼の所。居るは我。許事を欲し

い。我妾とあれば。人。許るを欲せ。是人情

なり。君子い。凡彼と我。渉るもの類。志る。

晋の靈公と臺の上より。人を彈。それ丸を避るを觀る

樂と。左傳。終。趙。巢王元吉。唐の太宗の弟。衢。當つ。矢を

後。誅る。

後。誅る。

後。誅る。

後。誅る。

後。誅る。

後。誅る。

後。誅る。

後。誅る。

後。誅る。

發し。人のことを避るを見く樂む齊の後主の歎と浴斛
おのめを置る人を裸にして其の内子に叫號して宛轉
と見て喜と又齊の文宣と道を行毎く死囚
と載せ従ひ他の怒るると何れに召出して是を殺し人
是を供御囚と呼ぶ人命を苾の如く視て喜怒は供と
いふもの惻隱の心なき人子何とさるるあり。

寒山拾得の豊干を以て饒舌となす。
神僧傳に豊干を拾得寒山子と
相友として歡事甚し一日
豊干呂丘端の風疾を療して因く大敬せしむ其時豊干に問ていつく寒
山拾得賢達有り也豊干對いつく寒山と文珠拾得と普賢あり因く呂
丘胤寺に入りて二人を見拜とある二人起走つくり豊干ハ饒舌の多言なり弥
陀も識らばして我を拜して何なさんとつくる。

大虚真人いよく悪人の賢人を害するると天子仰つて唾を
るが如く還つて己の形を汚さ風は逆て塵を揚るが如く
塵彼を汚さるるを還つて其身よりそぐと是を經中
の語あり經いよく悪人の賢者を害するると天子
仰つて唾するが如く唾天公小至らるるを還つて己の
身子隨ふ逆風に向て惡塵を颺まは上ある人を汚すを
何とす故に賢者の毀るる禍必き降る身を凶
も太虚真人いよく凡人百人は飯をあふる善
人一人は飯を何とすも志あむ善人千人は飯を

何と云ふ一人の學道者これと聖人の道は非ざるに飯を何と云ふ
小志ふど是も又經語あり四十二章經にいとく悪人
百人子飯を何と云ふ一善人子飯を何と云ふ善人
千人子飯を何と云ふ五戒を持者一人子飯を何と云ふ
一志ふと有る道書多くと叙典に依附とあれ又一證
なり。

春秋雨降木氷氷の事と木氷と何なり。一樹介と
名づく其介冒象をとりなり。唐の宣王憲本朝の見
く嘆いとていく是と俗に樹稼と名へる者なり。

諺曰樹稼と達宦怕る。達宦と宰相宰相と必と大臣大臣ととは當る者何
らんと其後宣王憲らん子應なり。

の事宅山氏考何
り頗る詳なり

王求礼と春の雪と祥とふさげ

表と草賀せん事と求むその時王求礼是を止く曰宰相陰陽と調變
や三月の雪と瑞雪とあり十二月の雷と亦瑞雷あり杜景儉と秋花
を以て瑞とあり則天常季秋のうち黎花一枝を出す宰相臣
陛下德輝木及び故はよく秋木再花さく周の文王の徳と雖も是
子過む杜景儉ゆりいく謹んて洪範五行の傳を按むるは陰陽倫と
此花を生むるは陰陽を漬ちあり臣慮る陛下教を布き礼を施す皆

礼典に虧る事有り。又臣等も泰々宰相とありて天理を助け、陰陽の和を成るは臣の罪あり。再拜して罪を謝す。則天いさく卿と真の宰相あり。君子いさく能く時を知るとこそ。

姜維の膽大さ斗の如く。蜀の張世傑の膽も亦大さ斗の如く。宋の区希範の忠臣なり。山房隨筆張世傑の膽も亦大さ斗の如く。李膽の膽大さ斗の如く。

南史。趙雲の一身都くろくを膽王雅の身を擧ぐ委く是膽。北史。曹不興の屏を画ぐ時誤りて筆を落さると因くその墨を

その中へ蠅を畫く。吳録。曹不興画をよくと孫權屏ぶを畫ぐありとて手て王猷子と扇を畫する時誤りて筆を落

を因くその墨を就く。特牛をあそみな誤り因く奇を見し。晋書。桓温王猷子とめて扇を畫し。越絶書。いさく慧の種と聖を生む。癡の種は狂と生む。桂の實と桂を生む。桐の實は桐を生む。此論恒の理のみ。必む

も然らば。凡梨を種る一梨十子。三子梨を生む。餘も皆杜の類を生む。齊民要術。鶻三子を生む。一と鶻となる。鶻三子を生む。一と鶻とある。夏雀の鶻を生む。楚鳩の鶻を生む。酒宅論。鱣を百数生み。鱣とある者才十二餘。或は龜とあり。鼈とある。滝水。此則氣の襍を得るそのあり。又蛇

談鋒寶鑑 卷之七

化して亀とあり。雉化して蜃とあり。雀化して蛤とあり。
 此等の忽曲屈と忘る。蹠跚を得。彼等の條然飛鳴。
 介甲を得る。ある鷹の鳩とある。仁子之あり。
 鳩の鷹とあるは。変じて不仁子之あり。鼠の化して鴛。
 とあると。変じて善子之あり。老楓化して羽人とあり。
 朽麥化して蝴蝶とあり。无情よりして有情。
 子之ある。賢女化して貞石となり。山蚯化して百合。
 とあり。有情よりして无情。子之ある。帝
 辛の時。雀鳥と生み。宋康の時。雀驪と生み。魏の黃初中。

子鷲鷹と生み。周の幽王の牛化して虎とあり。羊化して
 狼となる。此みる。塾の氣を得るものあり。是より甚し
 き。馬の人と生む。秦の孝公二十二年。狼の男と生み。人或は
 虎子化して。淮南子。或は龜子化して。後漢書。此皆氣の異るを得るもの
 のあり。此よを。以て往幾とゆる。知るべし。
 魯の昭公の八年。石晋の魏榆。言ふ。左傳。晋の愍公の五年。石
 平陽。言ふ。又載記。石陝。言ふ。左傳。晋候師曠。言
 問。石何也。言。師曠對。言。石。言。事。何。也。
 或。言。石。言。事。何。也。然。ら。ざ。る。は。民の

聽濫^{とんらん}あり。抑^{おさ}作事^{さくじ}時^{とき}あつむしつてハ怨^{うら}讟^と民^{たみ}了^り動^{うご}
 く時^{とき}と言^いいさる物^{もの}ありて言^いふ事^{こと}何^{なに}り昔^{せき}より
 災^{さい}異^いの譚^{たん}ハ如^{ごと}く確^{たしか}あるはあ。又^{また}晋^{しん}の惠^ゑ帝^{てい}
 大安^{たいあん}中^{ちゆう}小^{せう}張^{ちやう}騁^{ちゆう}が乗^{のり}る所^{ところ}の牛^{うし}言^いふていハ天下^{てんか}乱^{らん}
 る我^{われ}子^こ乗^{のり}く何^{なに}く小^{せう}之^の張^{ちやう}騁^{ちゆう}も懼^{おそ}る途^{とち}中^{ちゆう}よりあ
 る其^{その}時^{とき}犬^{いぬ}も言^いふ曰^い婦^ふる何^{なに}ぞ蚤^いさか張^{ちやう}騁^{ちゆう}も
 大^{おほ}に懼^{おそ}る唐^{たう}の左^さ軍^{ぐん}容^{よう}使^しの嚴^{えん}遵^{そん}美^みハ一旦^{いつたん}狂^{きやう}を發^はす
 手^て足^{あし}舞^ま踏^たを家^か人^{にん}皆^{みな}訝^{あや}る時^{とき}子^こ猫^{ねこ}犬^{いぬ}子^こ謂^いくいさく
 軍^{ぐん}容^{よう}常^{じやう}を改^かむい後^{のち}主^{しゆ}翁^うの顛^{てん}發^はするハ非^ひ常^{じやう}の乱^{らん}何^{なに}る

身^み一^{いつ}と犬^{いぬ}いさく彼^かを管^{かん}する事^{こと}あつむしつてハ怨^{うら}讟^と民^{たみ}了^り動^{うご}
 あまをなす。後^{のち}通^{とん}美^みの異^い路^ろ岳^{がく}相^{さう}乘^{じやう}むる所^{ところ}の馬^{うま}たち
 りち人^{にん}言^いを作^{つく}してつ。蘆^ろ菽^{しやく}花^かこの花^{はな}開^{ひら}くの後^{のち}路^ろ
 家^かあ。路^ろと馬^ば姓^{せい}あり。京^{きやう}房^{ぼう}が易^{えき}数^{すう}は白^{はく}牛^{ぎゆう}よく言^いふ其^{その}
 言^いよよめく吉凶^{ききう}を占^{うら}ふと有^あり又^{また}易^{えき}の萌^も氣^き樞^{しゆ}緯^ゐ書^{しよ}
 いさく人^{にん}君^{きん}士^しを好^{この}むと走^は馬^ば文^{ぶん}繡^{しゆ}を被^かる犬^{いぬ}狼^{ろう}人^{にん}の食^{しょく}とく
 らへ六^{ろく}畜^{しゆく}譚^{たん}言^いする事^{こと}何^{なに}りといふ。總^{そう}く師^し曠^{くわう}の数^{すう}語^ごの正^{せい}確^{たつ}
 なる。小^{せう}如^{にょ}とある。堯^{ぎやう}民^{たみ}按^{あん}ずる。此^こ類^{るい}の災^{さい}異^い漢^{かん}唐^{たう}以^い下^げの史^し五^ご行^{かう}志^し
 猶^{なほ}殿^{てん}。陽^{やう}翁^う仲^{ちゆう}李^り南^{なん}ハ馬^ばの語^ごを解^げ。唐^{たう}の僧^{そう}隆^{りゆう}多^た羅^ら
 長^{ちやう}侯^{こう}瑾^{きん}ハ鳥^{ちゆう}の語^ごを解^げ。陽^{やう}翁^う仲^{ちゆう}李^り南^{なん}ハ馬^ばの語^ごを解^げ。唐^{たう}の僧^{そう}隆^{りゆう}多^た羅^ら
 白^{はく}龜^き年^{ねん}ハ鳥^{ちゆう}獸^{じゆう}の語^ごを通^{とん}じ成^{じやう}子^し揚^{やう}宣^{せん}ハ雀^{せつ}の語^ごを解^げ。夫^そ鳥^{ちゆう}獸^{じゆう}の音^{おん}ハ身^み

と終るまで一律ある。……して語を執ちんや。左氏の証も野史の証も論あり。公治長ハ聖門の高足ありて此詭怪の名と受る宋之間の詩に至く不如黃雀語能免治長災と詠……たると真子以て實事とあまを似たり。世に……我々その腸を食うん……啗々噴々白蓮水の邊車……栗を覆……車脚泥は論て犢牛ハ角を折る。是を收……春秋の時の雀沉約の韻を用ゆることを知る。又怪むる……また太原の王氏麗の神を祭る……因て蟻の言ハ事を聞……奇譚ありと五雜俎に見ゆ。

道家より人身の中。三尸蟲有り……人の過失を記し。庚申の日小至……人の睡る小乗……是を上帝に讒む。道と李ぶ者遂小庚申を守るの説有り。唐の道士程紫霄一詩有り……深くその妄を辨む程の詩有り。

……不守庚申亦不疑此心常與道相依。王皇已自知行止。任甬三彭說是非。……千古の惑を破るに似……帝汝は歸……幽隱あり……照さ一念善あり……何ぞ三尸の讒を畏さん。一念不善あり……何ぞ三尸の讒を解さん。然る……庚申を守るに己身を守る……みと如む。澆民按……程紫霄終南の大極觀に會……朝の土……為言ひ……詩を作……惡を去る者……懼ら……示……事明人の隨筆に見ゆ……書……魚の木子縁……の峽中……鮎……樹上り声小兒の如……川子鮎あり。鮎似く足あり声……兒の啼……石班魚

溪澗の中ハ石の上ニ生カ鮒ノ魚ノ皆ハ以テ魚ヲ得ル事ハ多クあり。に縁ハ皆ハ以テ魚ヲ得ル事ハ多クあり。

春夏ハ早起シ鶏鳴ノ時ヲ取ル。秋冬ハ晏起シ日出ノ時ヲ取ル。蓋ハ陽ノ在リ。

事ヲ欲ス。道ヲ見ル。道ヲ書キ見ル。事ヲ欲ス。道ヲ見ル。道ヲ書キ見ル。

老泉ト老蘇トの號トあり。東坡ト長蘇トの號トあり。

天下ニ是ヲ傳ス。葉少蘊ハ燕語シ。天下ニ是ヲ傳ス。葉少蘊ハ燕語シ。

子瞻ハ黃州ニ謫シ。東坡居士ト號シ。晚年ニ老泉ト號シ。

山人ト號シ。是ハ眉山ノ先望ニ老翁泉ノを以テ山人ト號シ。

長公ノ印章ハ亦ハ東坡居士ト老泉山人トを以テ列ス。

これハ抑シ豈ハ蘇家父子ト別號トを同シせんや。古ノ重シ。

重シ。重シ。重シ。重シ。重シ。重シ。重シ。重シ。重シ。重シ。

とハ蘇家父子ト別號トの起ル。古ノ重シ。とハ蘇家父子ト別號トの起ル。

や明ノ文徵明ノ父温林原ノ守ト。衡山ハ籍ヲ其ノ所ノ名ト。

籍ハ合シ。故ハ父子ト。衡山ハ籍ヲ其ノ所ノ名ト。

韋仲將ハ書キ成ル。髮ハ白シ。魏ノ時凌雲閣ニ成ル。榜題ハ事ヲ忘ル。

書キ成ル。髮ハ白シ。魏ノ時凌雲閣ニ成ル。榜題ハ事ヲ忘ル。

今傳ル。髮ハ白シ。御覽ノ梁書ニ引ク。武帝ハ鍾王ノ真迹ト取ル。周ノ興嗣ハ韻ヲ成ル。

是と文ふ周興嗣しゅうこうじゆ宿しゆく李日知母の病なひちちちちのやまい侍しやく事こと
髪かみ白しろ張景憲の母卒ちやうけいけんのははのしやく一いつ夕たふ

王義之天性わうぎしちてんせい鶯う好このむ會誓くわいせい孤居ここの姥おや一いつ鵝がの善よく鳴なを養やしや

王義之わうぎしち賀がを命めいとて就しゆく見みる姥おやと王義之わうぎしち之の至いたらんとま

と聞きく意いを是こゝと待まちつ義之ぎしち之の嘆息たんそくを事こと数日すうじつ又また山陰さんいんの

道士どうし好このむ鶯うを養やしやふ是こゝと待まちつ義之ぎしち之の嘆息たんそくを事こと数日すうじつ又また山陰さんいんの

道士どうし好このむ鶯うを養やしやふ是こゝと待まちつ義之ぎしち之の嘆息たんそくを事こと数日すうじつ又また山陰さんいんの

宅たくは就しゆく寫しやうし給たまふ群鶯ぐんうを贈たまはんと義之ぎしち之の悠然ぜんぜん彼の

宅たくは就しゆく寫しやうし給たまふ群鶯ぐんうを贈たまはんと義之ぎしち之の悠然ぜんぜん彼の

好このむ笙せうを吹急ふきいそ就章しゆくちやう史游の善よを鶯うと食くふ事ことを喜よろこび校書きやうしよ郎らう

を授まる東歸とうきする時とき盧肇ろしやう詩しを送おくる云い妙吹應諧めうふいおうかい鳳工書定得ほうこうしよじやうとく

鶯う二子書にこしよと工こうある同どうく鶯うを好このむもすこ同どうく但義之たんぎしち之の

孤姥こおの意いを嘆息たんそくし羣王ぐんわうと偏へんは鶯うの肉にくを嗜しやくのみ其口腹そのくふく

ののめめふふささるるハ義之ぎしち之の比ひささるるハ甚劣しんじやくと覺おぼゆ。

疾膏育しやくかういよくお在ある治ちささるるううぞ秦しんの鑿やく緩くわん是こゝと知しるる傳でん疾しやくささるるに

心こゝろは入いる救きうふふるるううぞ階かゐの鑿やく許智藏しよちざう是こゝと知しるる傳でん疾しやくささるるに

許智藏しよちざうと召よむ孝王きやうわう俊しゆんの夢ゆめ亡妃わうひ崔氏さいし泣なくく智藏ちざう至いたらんとと必かなず

良鑿りやうやくよく疾しやくを療りやうささるるも心疾こゝろしやくを療りやうささるる事こと何なにと云いふ心こゝろよ

慎めば疾く嬰る事なくあり。

李行簡が父癰を病む楚甚し行簡ためその膿を吮ひてこ
もを地へ吐きしごと父霍然として病ひ愈めその癰
を吮は一あり。行簡の若きに至性し出づるあり然らば
漢の世孝を以て天下をおさむると稱するも猶難し
とて景帝太子の時文帝の為癰を錯り色まらぶ
る是を難く又寵を如くせんとなれを吮めく厭ふ
心あるは鄧通傳文帝の為癰を錯り衆の心を結
らんとして是を吮ふ事を耻ざるは呉起卒の為り

事あり韓非史記佞倖をわたりたりと呉起も又取
る事あり何とあるは吾がその妻は薄く宋の將
妻をそれ士を愛する真に非を知りてや。

孔子の木屐を蔡の客舎に盗りて論語隱義に孔子蔡に至て客
舎に宿する人あり夜に孔子の履を盗りて孔子の履は
一隻の履を盗り別は盗り遺ひて家におく孔子の履長一尺四寸
あり凡人の履と異る故に孔子を盗りて孔子の履は
晋の武庫ありて燬く事晋書の張華の傳に書に武庫の火に
累代の寶みを焼く孔子の履と漢に

董仲舒いよく仁をわたり人を治め義をわたり我を治む厚甫が
曰仁の字人に従ひ義を我に従ふこと文字を造るの意あり

秦謝五等の師鶴の唳を聞く晋大將此兵をりと抄晋元

瑛も鶴の唳を聞く是を叫南齊書云元の聲ありと疑瑛江陵を守り張

敬兒の軍白水に至る元瑛城外の鶴の唳を敗軍の氣を復振ふる

聞て是を叫堯民按むるの聲と思ひ懼英物走らんとす

其魂是を禱堯民按むるその何とば一時の

博士の驢を買氏く券と書と三枚の紙顔いす驢の字氏何と

家訓無用の文言多きをの書生の迂濶工箭手官宋史弓矢を授けらる劉氏

極く強と控嶺南ども閑劉氏あ在る時何の官を為す對してく

弓箭手官あり因て命して是を弓矢を授け

蒲元と性奇思多孔明のため小刀三千口と鑄く當世

小稱絶ちる因神刀と名づくも孔明の為し一脚牛

と造る糧を運ばし然るはさふるも木牛流馬の制

ハ豈蒲元は肪るものあらん蒲元別傳蒲元孔明の西曹掾といふ

と憂ふ木を以て一脚牛を作す事詳あり木牛を作す事詳あり木牛を作す事詳あり

宋劉の御仗小孔明筒袖の鎧帽何と二十五石の弩を射ど

を得る中機局を設け以て夜氣を應ず特し巧絶

を得る中機局を設け以て夜氣を應ず特し巧絶

ととも是も蒲元の輩製も者孔明軍務も心と勞

恐らくくへると瑣々たる物も及に暇何れと又武崗も

く諸葛の銅鼓と得るその何れ是を撃つ響き山谷を

震ふ嶺と隔く猶きりりといふ竟民按むる孔明いすく廬を出ざる時婦翁の黄氏もあきりれば木

偶にの麴のちたると見く感ぜり事何れ木牛流馬の遺制をん

顔子ハ十八にして天下仁に歸す東漢書曾子七十にして卒

名天下に聞ゆ顔氏夙慧晩達功を成せば則一あり竟民按むる

顔子の如きと論あつる家訓夙慧晩達功を成せば則一あり竟民按むる

榑木周公の家上よ生むその幹枝また質その正を得る

周孔と後世の榑櫟と為る家木その霧に效ふ義文王墓

上あつびよ著艸と生む義文後世のため易と作す

墓艸其異あると著す

大別山の陽興國寺の前よ古柏有り相傳ふ大禹手づみ

植る者あり山川紀異柏の根盤曲あつち小漢陽曲阜縣文宣廟

前あつびよ殿の西南抑のく柏の葉松の身の樹有り高き

五六丈相つと夫子の植る所封氏聞記曲阜の古城

顔回の墓有り墓の上は楠樹二株何れ三四十圍をくり土

人々の顔子手づつ植る述異 孔林の中は夫子子貢
 の植る所のもの猶存を獨り禹の植る柏のみは非む顔の
 楠あやど何るや否也傳はいそくその人と思へ猶その樹を
 愛む古と弔めその好んぐ是と護持を
 仲尼の弟子七十二人のち列向列仙と傳へ皇甫士安が高
 士と撰らむ陳長文の耆旧と撰ぶ並に七十二人何れも豈
 仲尼の弟子は彷彿とせむと欲するその人を得むして
 偷もとりて數に充とせむ實の聲は何れらざるものけん
 黄石公何れも何れの素書有りく亦丹書何れも葛仙公いそく素

書とせふも河上公以て漢の文帝に授くるものあり或
 ちりり如此あるは子房墓中は是を得るは應せむとい
 ま傳る所の素書その雁本と事疑あり豈をふはら
 張商英の筆なるんや丹書は言とて身身の八殺貪殘
 命の四業背惠恃己 眞は格論あり惜をなありく傳へ
 らん堯民按むる丹書と大の武
 王傳一事大戴記一見也
 常惠のつゝ蘇武と共に匈奴へ使む武を節と持て漢に
 還るさむと位典属國は過む惠の節を烏孫の爲り
 盗する自ら抄とて誅せむと然る小卒は長羅

疾ふると失いど漢の功を録するの惠は厚くして子卿蘇武の字

薄はりのあはれ也。

世れ言疾さへく曉るるのうらぎる者ハ身漸く縮小し

卒は小兒の如くある有る宋の口忽ち字を識ぶ数載し

てはハハめハ復る者何也愚直物を見くみふ曲弓

弦界尺の類尽く鈎の如きもの有宋の時盧扁ハ逢とも何と

以く是を療する事と知らむ。

丁公藤風を療するは最驗何也宋の解叔謙の母風疾を患

叔謙昕夕懇々禱る忽ち空中ハ語ありていらく此疾を丁

公藤を得く酒とあきけさるハ瘥ん因く遍く是を訪

く山一老翁の木を伐し遇ふをなまらるの木丁公

藤あり叔謙つぶさに来意を述べ老翁愴然とて是

は與へ并は漬酒の法を示さ顧視さるハ在る所を失ふ又

蕭叡明の母も風を病ぐ沉卧を叡明禱祈して輟さ寒

氣の節あをば叡明の涙みふ氷とある忽ち人有りて小

石画を以く是は授くいらく風病を療さ忽ち見へむ

画の中惟寸絹の丹書日月の字を為さのみ昔ハ顔舍蛇

膽と童子は得り晋書顔舍嫂の病は因く蛇膽を永むる陸

襄粟漿を老人は得たり。南史は襄の母むひつむ三升の粟漿を求む時寒くして暮し迫る忽ち老人門を請く漿を乞ふ尋く其父劉翳哲と奇薬を枕邊に得る南史は翳哲の母病み夢より此と有り食ふる夢をみて葉と梁彦光と紫石英と園所を得る北史は彦光の父疾医のつわり五石のゆきを前二事とまを小同一時紫石英と求むる得る忽ち園中を是を得る孝友の至性と神明は通ざる又あんど感格のともを疑らんや。

衛玠豫章より下都に至る觀る者堵の如く玠の體勞は堪む遂に病死を人こそを衛玠と者殺さるといふ蘇子瞻海外より昆陵に歸ると紀暑と病む小冠を著け半臂をきて船の上

り坐を岸の左右十萬人を伐觀る子瞻坐客を觀るいまく我と省殺事ありきいまくいまくいまくいまく竟り荆溪小卒也。

昔古強ある者有り敢く虚言をあていまく己は四十歳曾く堯舜禹湯を見ゆ是を説くと方々實の如く又り孔子嘗く我を勸て易をよまし心曰くこそ良書なり西の狩に鱗を獲たりこれ孔子は語るいまくいまく善祥は何れも蔡誕曰老君の爲に数頭の龍を牧む項曼都いまく龍小乗り天子上る紫府を過き金床玉几是

々あつひ抱抱宋の張懷素道術神子通飛飛禽禽みろくろり孔子

少正卯を誅誅。多きうて諫諫く以以くたふたを命命。

漢楚成皋小相待待ま。まを志志をく高高を登登く戦戦を觀觀る虞

仙姑婦人年八十て少女少女の蔡京蔡京は詣詣る。一の犬猫犬猫を見見くその

背背を拊拊くいまく此章此章惇惇なり古古より方士方士者流者流抑抑む

ね夸誕夸誕多多くかくの如如くああぐぐをば世世を欺欺き俗俗を駭駭む

不足不足らむと抑抑り。世俗世俗まを因因く是是を尊信尊信を聲聲を聽聽響響小

集集る雲雲の如如く萃萃り霧霧の如如く合合を文成文成五利五利漢漢の武武帝帝の時時の徒徒を術術

よく人生人生を動動ます至至る谷谷永永抑抑りひらく風風を捕捕影影を繫繫

抱朴抱朴の法惑法惑の論論何何ぞ。

李景遜李景遜の母唐の湖西鄭鄭因因その牆牆壞壞く錢錢を得得る事事盈盈ます至至る鄭

香香を炷炷く天天を祝祝くていまく願願く諸孤諸孤の亭亭問問成成ること何

らば此此を敢敢く取取らま命命ト掩掩く是是を築築く蘇子蘇子膽膽宅

を眉眉に二婢婢足足忽忽ち地地に陷陷ることを見見ること板板の大大甕甕ヲ

覆覆く何何ぞ人人の下宿藏宿藏の物物あり子子膽膽の母母命命トて

函函く土土を以以く是是を塞塞く二母二母の智識智識賢明賢明豈豈く二筭筭

幃幃の俊俊のみなん也男子男子とんども及及むことることの遠遠く

胡景畧胡景畧一怒一怒くみろくく其齒其齒とらみ齒齒みふ血血を流流すこと。

張睢陽神氣慷慨ちゆうふやうしんききょうがい一々賊と戦ふ毎々大に呼よく師と誓ちかひ昔裂まじりく血ちと流ながき齒牙しつがみみ亦碎なく又唐の高祖たうこうそあつて侍臣しやくしんよりつゝ云吾われをく蘭相如らんさうじよの秦皇しんわうと叱のたまひ皆みなさけり血ちと出でさ王君わうきん廓くわく往むかひ實建徳じつけんとくを撃うつ出でる戦いくさをくんと李靖りせい是こゝと過すむ君廓きんくわく發憤はつふん一々大に呼よく目めおめび鼻耳びじ一時いちじに流血りゅうけつとそを戦いくさと勇氣ゆうきあり睢陽しゆうやう氣賊きぞくと滅めちんと欲ほつ一相如さうじよ氣き秦しんに抗かうせんと欲ほつ一彼をその血ち目皆みなに溢あふる忠義ちうぎの氣き激げきするより流ながる景畧けいりやく君廓きんくわく一時いちじの怒氣どき憤ふん盈あふり

盧縮沛ろしゆくはい公こうと同里どうり吳質ごしつ曹丕そうひと席せきと接せつ許紹しよせうら唐高たうかうと共ともに李りびの其後そのちのち一ひとおよんと並ならび里関りかんの曩好なうかうと存ぞん一硯席えんせきれ旧歡きうかんと追おひき寵遇ちゆうぐ加かるとはるをそを貴たかくと人主にんしゆと為なる猶故交なうこかうと遺いるをそを則すなはちち彼を身み樞要しゆえいと都みやこ問とふ布衣ふいにはおめをぎる者ものの何なにの心こゝろと知しらるべし

秋梁しゆりやう公こう性しやう醫藥いやくに明あり尤なほも針術しんじゆつに妙たうあり制せいに應おつ

一ひと時華州しやしゆうに富室ふしつの兒こあり鼻端びたんに贅ぜいと生なす

一ひと大おほき拳石けんせきの如ごとき根蒂こんてい鼻びに綴ずいりて纒まり小食筋せうじやくじんの如ごとき

是こゝに觸ふるはけ酸痛しやくふん骨こつと刺さり兩眼りやうがん贅ぜいの為ためにあややと目め睜しやう白はく

小翻を楚甚し絶せんともその家巨牌と掲げ此を療する者と求む馬子絹千疋を許さ公一見して惻然としてい
 るく吾よく為さふも脳後の下ろ針をさす寸許仍て
 病者針氣の病は速まると問ひ遽に針を拵し贅手は應
 して落る目瞳初如しその家且泣け且拜を馬子
 の繻をりて公曰吾急病は急し志を
 このののみ左傳顧むて去る昔人の云良相た
 らざるば則良医と為る蓋濟世の術釣るべきあり梁
 公の如きは良相良医兼長とて並その效を収るものなり。

續博物志いらく堯の獬豸の皮を緝り以て帝帳とあり
 そ後世恭儉の主あて上書の囊を集り殿帷とあり
 帝彼の第茨土階の世いんぞ供帳の侈をあらして一此
 に至らんたて當時獬豸以て重となさば皋陶を以て
 用ひて有罪をさしめん然るも堯更つて其皮を寢處
 とせん也其肉を食く其皮を寢す管子いらく武王侈靡を
 今していらく豹擔豹裘して廟に入ることを得る故に
 豹皮百金功臣の家兼千種あり一豹皮を得て聖王は
 一物を珍として臣下の累を貽んや尤も荒唐に属す。

南越と孔雀と以く門戸とをざり。崑山と璞玉と以く鳥鵲
小抵つ有餘と忽ち山小居け魚鱈と以く禮とあり。沢
よ抑もげ鹿豕と以く礼とあり。記 足らざる所と珍とを
をばちり。

王莽の時南陽の市中は肉塊を生を斫ども刺ども入るを
以く費長道と後漢の費長房 まとく道いり此もの一ハ肅と
名づけ二ハ仗と名づけ中ハ鐵券あり長三尺六寸。つ
王家衰へ刘家まきに興らん七歳の女子とてそり
尿ちげ開る一莽是と試むるが果して然る。記 搜神
記

魏志は公孫淵の時襄平の北市は肉生む長圍おのく数尺頭
目口喙あり手足あくして動揺を占くいりく形あり
て成らんと體あく聲あく其國滅ちん載記劉聰の時
流星平陽の北十里は落つ是を視もげ肉あり長三十歩廣
さ二十七歩臭と平陽は聞ふ肉の旁常に哭声あり生肉乃
異と大都凶國の徴なり。

毛寶の軍人龜を江中は放つ軍人の江は投さるよ及んく石上は
おつるが如きを覺へ竟り岬に登るとを得る。記 龜潭に是を送る
彭彖の李進勅魚を江中は放つ。進勅魚を賤く金陵に至る船の内
千万人誦經の声ありを察

ちまの即ち舟中の魚を放つ。進勅の江に墮るふ及んぐ足下履とら
あきあり困るるれを放つ。有るが如く一竟は以て濟るとを得る。進勅業を改めく薪を敗ふ風一
下に見る是に乗る遠く一念生を好めば感麟介はおよぶ人なり何
ぞ苦んぐ必ぶ殺を好ん。

齊の師敗る歸る晋の爲に辟司徒の妻を問ういれく君免る

や銳司徒免る銳司徒を銳兵を主とするい中く君と吾父と

免る若何ともさへる言と餘人の亦いん君子いれく重んずる所

を知る成二年の左傳君父と夫と重くと為るがあり齊王使者を

して趙の威公は書と抑るむいすむ發せぬ威公使

者小問いれく歳も又恙あり君子曰重んずる所を知る戦国策

唐仲俊も千字文と讀くさると何なり蓋心動けバ神疲

るの四字あり此を以て平生事は遇して心を動るる

老に至つて衰むるれ千字文のたむる童子ありて此を

習いざらん也仲俊竟も四字を以て力を得るさふも知

る書と讀るの言下り見ると何をば則巻を引

けバ益何なり。

王聖美孟子を讀くいれく頭より曉らむ孟子諸侯を見へ

む何^えに因^りく梁^{りやう}の惠^{ゑい}王^{わう}を見^まゆ。聽^きく^の愕^{がく}然^{ぜん}と^して對^{たい}あ^る。
そ^のも^と孟^{めい}子^し諸^{しよ}侯^{こう}小^{せう}見^{けん}へ^{ざる}信^{まこと}ふ。こ^のも^と何^{なに}を^も又^{また}う^つく^はい^はさ^す。
追^おら^ぶぶ^られ見^{けん}ゆ^べ。當時^{とうじ}惠^{ゑい}王^{わう}を^あ卑^ひ。幣^{へい}を^あ厚^{あつ}。
以^もて賢^{けん}者^{しや}を^ま招^{まね}く^はみ^つら^う。垣^{かき}を^ふ踏^ふ。門^{かど}を^あ距^{あは}の^しは^はら^う。
ま^の何^{なに}ぞ^し一^{いつ}見^{けん}ゆ^べを^ま妨^{まげ}ぐ^はん^や見^{けん}ゆ^べを^ま枉^{まが}ぐ^は見^{けん}ゆ^べを^ま非^{あや}む^べ。則^{すなは}ち^ち
此^{こゝ}を^あ見^{けん}へ^{ざる}と^しつ^まも^も又^{また}宣^{のたま}ふ^べ。

郭^{くわく}原^{げん}平^{へい}。范^{はん}元^{げん}琰^{えん}筍^{しん}を^あ盜^{ぬす}む^者の^こめ^り。橋^{はし}を^た立^たて^る渡^{わた}る。
竹^{たけ}を^た植^うへ^る。呼^よび^こ溝^{みぞ}を^あ穿^く。桑^{そう}虞^よ氏^しを^あ盜^{ぬす}む^者の^こめ^り。橋^{はし}を^た立^たて^る渡^{わた}る。
因^より^あり^て並^{なら}び^に南^{なん}史^しを^あ出^だす。桑^{そう}虞^よ氏^しを^あ盜^{ぬす}む^者の^こめ^り。橋^{はし}を^た立^たて^る渡^{わた}る。
此^{こゝ}を^あ通^{とほ}る。盗^{ぬす}む^者を^あ傷^やむ^者。因^より^あり^て。君子^{くんし}の^いま^はら^う。厚^{あつ}道^{どう}あり。

乃^{すなは}ち橋^{はし}を^た立^たて^る道^{どう}を^あ除^ぬく。も^のあ^つて^は過^ある^はあ^らず。昔^{むかし}人^{ひと}園^{いん}蔬^そを^あ
竊^{せき}を^あ見^{けん}る^者何^{なに}ぞ。宋^{そう}の^{しやう}間^{かん}に^あ伏^ふす。く^はら^うを^あ避^よく。以^もて^あ
の^こ去^さる^を俟^{まち}つ^た。只^{ただ}か^らい^はれ^かく^はや^を足^ある^を。

左^さ傳^{でん}晋^{しん}の^こ子^し貢^{こう}を^あ。鄭^{てい}人^{にん}の^いま^はら^う。曰^い君^{くん}楚^その^い命^{めい}
何^{なに}に^あ一^{いつ}介^{けい}の^い行^{ぎやう}李^りを^あ使^しす。寡^{くわ}人^{にん}を^あ告^つぐ。
い^ま人^{にん}抄^{しやう}を^あむ^ね行^{ぎやう}装^{さう}を^あ以^もて^あ行^{ぎやう}李^りと^ああ^らず。非^{あや}ま^り
鳥^{とり}蹟^{せき}を^あ見^{けん}る^者字^じを^ああ^らず。我^{われ}知^しる^は蓬^{ほう}轉^{てん}を^あ見^{けん}る^者車^{くるま}を^あ為^なす
知^しる^は木^きの^う浮^うを^あ見^{けん}る^者舟^{ふね}を^あ為^なす。知^しる^は鳴^なを^あ見^{けん}る^者施^しを^あ制^{せい}
魚^{いさな}を^あ見^{けん}る^者帆^かを^あ制^{せい}す。古^こ人^{にん}の^{せい}作^{さく}を^あ因^より^ある^者所^{ところ}を^あ。

漢の孝和の時南海より龍眼荔枝と献す。十里より置馬つきの

五里小一候陣屋の如きもの驛馬ちり夜傳送して死すもの有る小

至る時唐堯上書あつていさく二物殿に升るいさく必は

一毛年と延壽と益は河に請ふ此を罷す後漢書謝承の

則荔枝と献する由来は久く一騎の江塵妃子

笑ひらし語るもろれより先漢官を河り

事あらん。

柳子厚國語を法や文章を法り集中國語

と非と論り蘇子瞻嶺外の特子子厚の

文と陶の詩柳文此と喜び北帰する小及ず人の書を與へく痛

く子厚と詆る時今斷刑四維陰を用ひて陽は此と非と恐

らくの英雄人を欺くあり。

庚鳥の雄は大し雌は小なり惟鷲鳥の雄は小なり

雌は大なり人類も只小あり者精悍多し

鳥は雌雄と知らんと欲するのの翼を以て此を辨む翼

右左と掩ち雄あり左を右を掩ち雌あり

昔は日南より象を貢す一雄九真少く死す雌ありもの

主と也り身小著く莖州と飲食す象の子

の皮と見ると則泣く。物情何そ必^さく^く人情^{にんじやう}殊^{こと}あらん
稷^{こむぎ}の棄^する^るも^も鳥^{とり}此^{こゝ}と^と異^{こと}ま^ま子^こ文^{ぶん}の棄^する^るも^も也^や虎^こ是^{こゝ}

と乳^{ちち}を^を傳^{つた}齊^{せい}の頃^{ころ}公^{こう}の棄^する^るも^も也^や狸^り乳^{ちち}と^と鷓^せを^を

覆^{おほ}ふ。妻^{つま}の蕭^{せう}同^{どう}叔^{しやく}子^しの生^なず

莫^な英^{えい} 一名^{いちめい}と^と靈^{れい}英^{えい}亦^{また}仙^{せん}英^{えい}と^と名^なつ のいつ^{いつ}も^もや^や三^{さん}五^ごの^の生^なト^ト盡^つ 朝^{あさ}より^{より}望^{のぞ}み^みの^の日^ひ毎^{まい}に^に英^{えい}と^と生^なず

三五^{さんご}の^の生^なず^ず月^{げつ}の^の生^なず^ず應^{おう}を^を閏^に月^{げつ}の^の一^{いち}節^{せつ}と^と益^{えき}を^を辛^{しん}の^の二^に子^し

と以^もて^て衛^{ゑい}と^とあ^あま^まま^まの^の月^{げつ}数^{かず}に^に應^{おう}む^む植^{しょく}物^{ぶつ}の^の月^{げつ}成^な知^ちる^る

の^のな^なり^り。長^{ちやう}春^{しゆん}樹^{じゆ}の^の花^{はな}と^と春^{しゆん}の^の色^{いろ}碧^{せき}あり^り。春^{しゆん}尽^つむ^む落^{らく}つ^つ。

夏^{なつ}の^の色^{いろ}紅^{こう}あり^り。夏^{なつ}の^の末^{すえ}の^の凋^{しやう}む^む秋^{あき}の^の色^{いろ}白^{はく}秋^{あき}残^{ざん}ら^らむ^むは

萎^{わい}む^む冬^{ふゆ}の^の色^{いろ}紫^{むすし}あり^り。雪^{ゆき}の^の遇^{あひ}謝^{しゃ}と^と植^{しょく}物^{ぶつ}の^の時^{とき}を^を知^ちる^るもの^{もの}あり^り。

樹^{じゆ}葉^{えふ}蓮^{れん}の^の如^{ごと}く^く樹^{じゆ}身^{しん}桂^{けい}の^の如^{ごと}く

水^{みづ}よ^よく^く物^{もの}を^を載^のせ^せ弱^{じやく}水^{すい}の^の苒^まを^を負^おむ^むる^るも^も何^{なに}と^とも^も金^{かね}石^{せき}と^とう^うま^ま

そ^その^の河^かに^に澄^{すま}水^{すい}獨^{ひとり}り^り金^{かね}石^{せき}を^を沈^{しづ}め^めて^て舟^{ふね}人^{ひと}

を^を渡^{わた}る^る首^{くび}瓦^わ鐵^{てつ}と^と鷓^せと^と白^{はく}あり^り然^{しか}る^る小^こ丹^{たん}鷓^せ何^{なに}り^り。周^{しゆう}の^の昭^{しやう}王^{わう}の^の時^{とき}空^{くう}脩^{しゆう}目^め

鷺^{さぎ}と^と白^{はく}あり^り然^{しか}る^る小^こ朱^{しゆ}鷺^{さぎ}何^{なに}り^り馬^{うま}の^の果^は下^かあ^ある^るもの^{もの}何^{なに}り^り。

漢^{かん}の^の桓^{げん}帝^{てい}の^の時^{とき}此^{こゝ}を^を獻^{けん}む^む注^{ちゆ} 然^{しか}る^る小^こ亦^{また}果^は下^かあ^ある^るもの^{もの}何^{なに}り^り。日^{にっ}南^{なん}郡^{ぐん}より^{より}出^でづ^づ高^{かう}き^き三^{さん}馬^ば

千^{せん}里^りあ^ある^るもの^{もの}何^{なに}り^り然^{しか}る^る小^こ亦^{また}果^は下^かあ^ある^るもの^{もの}何^{なに}り^り。

晋書荀晞募
千里の牛を得る。

古の善く馬を相するは寒風是麻朝管青子汝厲の属

あつて呂覽みふ馬の一節を以てその驚良を知るこそ己に

奇し又丹丘国の人輒馬鳴を聴く腦色を別つ。蓋

馬の腦色たぐ赤きもの最上月行千里黄日行千里青漸百里

黒水入毛皆良色なり白きもの最下多力なり

其術ちんそ畜牝牡駕黄の対し出るのみあつんや。

肉眼を具し者區々たる毛色を以て馬群を別とせ。丹

丘国の人を為し笑ふとん。

馬穀を食へば足重し行て何ともか。雁粟を食へば翼

重しして飛て何ともべ。これ人己の養を以て此を養

ふ。故にその性を失ふ。若し馬を以て馬を養ひ鳥

を以て鳥を養ふ。則その飛走の性を遂ん。

中射の士竊に荊王不死の薬を飲み。荊王は城殺さんと

欲を中射の士いそ。薬不死を以て名づく。臣

を殺さば是死薬あり。王よりつて殺さば戦国策その説

辨し似しきと。東方曼倩も。此事何ぞ。漢の武帝

齋まると七日あつて。君山不死の酒を得たり。朔請く

此を祝し一飲にして冬を帝此を殺さんと欲し朔
よく朔を殺して若死さばこの業驗何くぞらぬ。其
驗何をも以てせげ殺さるるも必ず死せぬ。真に滑誓
の雄あり。

眼と身の鏡耳の體の腑視る事多きを鏡昏く聴く事多
くれば腑閉づ面と神の庭髪を腦の華心悲めが面焦と
腦滅せれば髪素し。精を體の神明へ身の寶勞
多きを精散ま。營い竟まば明消ま。この事衛生の經をな
まらざる。

晋の范甯つゝ目の痛を患ふ張湛は就く藥方を求む張
湛是法を授けてわやく書を讀み代捐る一思慮減ま
二内視を專よと三外視を簡よと四且抄る起る五
夜蚤く眠る六其の要と括る七其うち内視を專
小よと言ふも是を尽せり。天隱子いよく九人の目の
終日他人を視る也小心もまよと遂は外は走る終日他れ事
と按む故は目もまよと外を逐く瞻る故に營し。浮光
いよと嘗く復照まあふと如何ぞ病がらんは病がら
るに内視を專よまよとを能くは。孝道の功半あり。

豈くふとあり目疾と瘵をばさそのみあつらんや堯民按む

視及視と聖人の道の樞要なるを
老莊の内視と頗る異あり。

再関と朱龍と失をばさ擄をちりる王珣と青馬を得

く貴し然るもふち乗せり所の馬よく主人

と禍福さるる載記に再関乗む所の赤馬と赤龍と一日行くと千里
燕の騎是を圍むと数周再関馬と躍し圍と潰さ東に奔

事二十餘里馬故ありて死す容略を為し擄とせり○元史に王珣と武
力人絶し騎射と善をわたり道士は遇し王珣より曰君の相たるは

奇あり密日の青馬は因り貴らん王珣いふは是と信ちんとその後容は
青馬と以り来て驚ぐ王珣をばさ喜ぐ曰道士の事驗はる乃ち倍償

て是を買ひ後乗るに以り戦はるその
進退周旋悉く意の如くあり祥覽と慶が刀を受く公卿とあり王

双に賈刀を獲く魏の將となる然るもふち乗せり所の馬よく主人

ろの刀よく主人と昌隆さるる晋書に昌隆は昌黎の人は何れぞは刀はるひら
と相しとおしらるる必す三公に登

此刀を服す昌黎王祥より曰有るその人は何れぞは刀はるひら
害をかきん郷公輔の量はる故に以り相與し王祥固く辞を強く是と受く

王祥薨むるに臨ん刀を以り弟の王覽に授けし後かきんは與り此刀
はかのし足ん王覽後ち是と佩り江左に興る古今刀録にいふ王双は市中

ふて二刀を買得る者貴し是と得る者貴し王双は佩り魏の將とあり○元
史にいふ王珣は陸水の濱を行く一の古刀を得るその背銘にいふ幸く克さ

る事あり動く必す功を成さず常は是と佩る者
警言はる毎しあり鳴故に向所のみを捷やし

張思和の獄と断む諸の囚らるるに柵枷鎖を著る人生羅刹

と號さ張思和生む所の男女みか肉鏢を著る手足少き

並に肉柵を著る太平大業隋の中に卒何りて諸囚と

暴酷を後し一子を生む肩上小肉柵何りて頸あり五行
記

毒の報かゝの如し。

書籍唐の以前の寫本多し。宋以後は刊鏤多し。李者傳録の艱を

習ひ見る故にその誦讀精詳あり。宋以後は刊鏤多し。李者書

馮道奏して官に請ひ六經を鏤く板印して行ふ。宋の寫本少し。李者書

太宗淳化中史記前後漢と有司の摹印に付る。今日小可くして二時

の得易きを習ひみて誦讀よめて粗率あり。今日小可くして二時

割版の濫極あり。文字畫の恨多き者の刻は工少し。校と略

と尤恨むるに藏し侈し。て閱るに怠る。坊間豕豕の書多し。に

談鋒資鏡卷之下終

第百四十八号



Handwritten notes at the bottom left of the page.

